カ島

講談社

小田実

ガ島

小田実

ガ島
昭和四八年一〇月二四日第一刷発行
著者——小田実
© Makoto Oda 1973, Printed in Japan
発行者——野間省一
発行所——株式会社講談社
東京都文京区音羽二—三—三　郵便番号一二二　電話東京〇三—九四五—一一一一（大代表）　振替東京三九三〇
印刷所——廣済堂印刷株式会社　製本所——黒柳製本株式会社
定価——八五〇円
落丁本・乱丁本はおとりかえします。

この書きものの蛇足としてのまえせつ

こういう書きものを何という名前で呼んだらよいか。コッケイ小説。マジメ小説。あるいは、戦争小説。平和小説。旅行小説。冒険小説。何だってよろしいが、小説というより、この小説、書きものということばを使ったほうがもっと適切なような気がするが、作者の私にあえて言わせてもらえば、政治小説である。あるいは、もうひとつ言って、ポレミック小説。

当今、どうやら、そういう小説ははやらないらしい。誰もが、革命派を自称・他称する小説家までが、文学小説家の顔をしたがる。それは人それぞれの好きずきであってとやかく言うこともないが、なんだか、それではさびしすぎる。せっかくの文学の広大な領域、小説というなんでも入るバスケットの巾が狭くなって、面白くない。小説の対象のはずのかんじんの人間の巾まで狭くなって、みんな、何やら、蒼ざめて見える。それで、政治小説である。ポレミック小説である。カート・ボネガットというアメリカ合州国の小説家、最近の「プレイボーイ」のインタビューのなかで、自分の書きものの動機は、すべて、政治的なものであると言っていた。私も彼にならって、この小説、いや、書きもの、きわめて政治的なものだと言っておきたい。私の同輩にはボネガットがいて、先輩には、東海散士という政治書きもの家もいる。

一九七三年九月

小田　実

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

長篇小説

ガ島

装幀　粟津潔

一

なにしろ、こわいことが昔から大きらいな男なのである。それで、ヒコーキなんか乗ったことがない。自慢じゃないが、ほんとうの話だ。あんなものが、そもそも、飛ぶはずがあるものか。昔の、プロペラをたよりなげにまわしてやっとこさ飛んでいた「赤トンボ」あたりの練習機ならいざ知らず、今の世の中、そんな悠長なことではラチがあかぬ。ピカピカ光る巨大な翼にエンジンをいくつもぶら下げて、ゴウッーとかウウッーとか首狩り族の雄たけびそこのけのドー猛な叫びをあげながら、デパートほどもあるジェット機が中天めがけて一直線に馳け昇る。言わずと知れたジャンボというやつだが、わたしの見るところ、あんなものが実際に飛ぶはずはないのである。あれはただあんなふうに見えているだけのことで、わたしのような下界の見物人も、なかの団体旅行も、夢を見ているのである。老若男女、そろいもそろって夢を見ていて、それで、飛ぶ。飛ぶように見える。

ただ、あいにく、わたし、夢を見るようなヒマ人の人生は送っていない。目下のところ、途方もなく忙しいのである。バカバカしい額のお金を払って、夢を見ているひまはない。まずもって、わ

たしの店、これははやっている。はやりにはやっている。最初に始めたのはアンミツ屋であった。郊外の女子高校のすぐわきに手ごろな店舗を見つけて開いた。これはあたった。女の子は甘いものが好きで、ことにアンミツとなると眼がない。五年そこでがんばって、今でもその店は人に頼んでつづけているが、市内に進出してアベノ橋にトンカツ屋を開いたのが、事業の第二段階であった。しばらくして、となりのパチンコ屋も買って店をひろげ、パチンコ屋を買ったおかげかどうか、あたりがつづいて、今ではキタとミナミのかなりいい場所に一店ずつもって、アベノ橋のすまい兼用の本店をあわせると、三店のチェーンである。「トンカツの西川」というと、テレビのスポットのコマーシャルでおなじみの「うまいで、安いで、ワッハッハッ」の店ということになっていて、このあいだなんか、新聞の人が、おたくの薄利多売の秘訣は、と訊きに来た。写真もとられたが、わるいことに、市内で大きな火事が起って、そちらの記事に押し出されてわたしの店の記事は出ずじまいであった。十部ほど買うて来いとボンにその日の夕刊を買いに走らせたのだが、何にも出ていなかった。お父ちゃん、何で出エへんのやろ、忙しいお父ちゃんの時間つぶしよって、これ、サギみたいなもんですわ。どこからそんなセリフをおぼえて来たのか、ボンはませた口をきき、わたしは駄賃に百円にぎらせた。

「うまいで、安いで、ワッハッハッ」のスポットの文句もわたしが考えたのである。代理店にたのむと、バカくさい値段を言ったので、そんなら自分でつくりまっさとその場で考え出した。スポットの文句は漫才師のトロ八が言って、トンカツの大きいところをがぶりとひと口。トロ八をミナミの寄席で見つけて来たのはキタの店のマスターの田口である。トロ八はトロ七と二人で漫才をやっているのだが、たいしてうまくない。ただ、口がいかにも大きい。それに、安かったのである。代理店の男もテレビのお人もトロ八なんていう名前はきいたことがないと言っていたから、ギャラは

めっぽう安かった。「うまいで、安いで、ワッハッハッ」はあたった。今でもあたっている。ボンの学校でも、みんなが何かと言うと「うまいで、安いで、ワッハッハッ」を言い出すので、先生が困っているという話である。このあいだ、父兄会で子供が真似をして困る、やめさせてほしいと申し入れた父兄がいて、トミ子は困ったそうだ。先生はさすがに笑ってとりあわなかったそうだが、申し入れた父兄も、もちろん、わたしのところが震源地であることを知っているのである。知っていて、イヤ味を言ったにちがいない。おかげで、トミ子は父兄会から帰って来たあとひと晩機嫌がわるかったが、ああいうのは、わたしの仕事のさしさわりになって困る。おしまいにはあんなコマーシャルやめはりなはれなとまで言い出したのだが、あとできくと、申し入れをした父兄というのは電気屋の戸塚の細君で、女というものはまったく見さかいがない。あそこから仕入れたカラー・テレビの故障のことで、一度、ねちっこく油をしぼってやったことがあった。油をしぼったあげく、一万円返させてやった。薄利多売が身上のわたしのことだ、勘定はまちがいなくしておきたいのである。それが商売というものだ。

女は見さかいがないと思うのは、このごろ、トミ子までが車を買えと言いだしたことだ。今日（きょうび）、誰だって、車の一台ぐらいもっているというのである。トミ子は、親類の誰かれ、近所の誰かれの例をあげた。なかには、子供に一台あて車を買ってやったというアホウまでいる。レストラン「藤木」の主人である。子供が三人いて、上二人は男、いちばん下が女の子だが、「藤木」のオヤジ、今年二十になったばかりだという大学生の女の子にまで車を買ってやった。妾のほうにつくらせた子供二人のほうにはどないしたんやろ、やっぱし、平等に車買うてやりよったんやろかとわたしは言ったが、そんなことうち知りませんで、知るはずがあるもんですかとトミ子はこわい声を出した。トミ子には奇妙に尼さんめいたところがあって（そう言えば、昔、尼さんにあこがれたそうで

ある。頭まるめようと思うたこと、ほんまにありますねんで。いつか、夫婦ゲンカのあとで、そうおどかすように言った)、たとえアカの他人のことであっても、浮気の話や妾ウンヌンとなると、露骨に不機嫌になる。そのうち、そのウンヌンがわたしのことであるかのようににらみつけ始めるので、わたしは途中でやめてしまう。そのときもやめてしまったが、おかげで車の話も途中でおしまいになった。

車の話の次は旅行の話だ、おきまりのことだがどこかへ連れて行けという。わるいことに、最近、商店会で旅行の世話をするようになった。おかげで、みなさんむやみやたらとお出かけになる。それもはじめのうちは「スズランと夢の北海道一周」やら「ふるさとの憩いの九州温泉めぐり」だったのが、いつのまにか、行先が香港になり、ソウルになり、グアムになった。いや、パリ、ロンドン、ローマというのまで立ち現われる世の中である。香港で、すばらしいパンマにありついたという人がいた。からだじゅうをなめまわしてくれて、おかげでもう言うことをきかないとあきらめていたものまでみごとに動かしてくれた。そういう幸運にありついたのは「すし善」の畑さんであるが、そのお助け婆さんみたいな女を探して歩いて、結局、見つからずじまいだったと歎くのは喫茶店「ハッピー」のマスターの堺だが、彼は、まだまだ、そんな年ではないのである。なめまわしてなんかもらわなくてもけっこうやって行けるのだ。男がパンマなら、女は香港では買物だとことはきまっていて、手あたり次第に買う。時計。万年筆。ワニ皮のハンドバッグ。バンド。それに、言わずと知れた宝石である。何でも買う。回春の秘薬だというふれ込みの、ゴルフの球ほどもあるまっ黒い丸薬を買って来てくれた奥さんもいた。本屋の「文化堂」の奥さんだが、何であんなものをお土産にくれたのか。まさかわたしに気があるためでもないだろうし、気があったところでこの界隈「三デブ」のひとりだともっぱらの評判の奥さんなどまったく願い下げにしたいが、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

秘薬は一向に役に立たなかった。その晩、早速、ためしにのんでみたが、ことにとりかかるまえに眠ってしまって、それもふしぎに気持よく眠って、朝、目をさますと、もうトミ子は起きていて、カナエとボンにいつものように口やかましく小言を言っていた。

わたしが車をもたないのは、そんなものをもつのは無駄だと思うからである。もちろん、営業用にはライト・バンが一台、小型トラックが一台あって、その二台を「トンカツの西川」のチェーン三店が順ぐりに使っているのだが、それはあくまで店の仕事のためのものであって、自分でどこかへ出かけるときにはいつでもタクシーである。車を自分で運転して事故でも起したらどうするのか。まずもって、わたしは殺生はきらいである。殺されるのもいやだが、殺すのもいやなのである。それに、今日(きょうび)、人命もインフレのおかげで高くなって、補償もバカにならない。千万円もとられて、その上ローヤにもほうり込まれるというのだから、車を自分で運転している人の顔を見ると、アホウに見えて来て仕方がない。そこへもって来て、税金も維持費もなかなかたいへんだということではないか。駐車場を探すのがひと仕事ですと車をもっているお人は口をそろえていう。それでいて、彼らは車を手放そうとしないのだから、ふしぎである。ふしぎと言うより、彼らは、やはり、まったくのアホウである。

アホウついでに言うと、世の中には、百キロとか百二十キロとかいうスピードを出してよろこんでいるアホウがいる。あんなに飛ばして何がいいのかと訊くと、気持がスカッとするからだという。「藤木」のバカ息子なんかがそんなきいたふうなことをほざいてもわたしはビクともしないが、エイ子までいい年をして言うのである。エイ子は「クロ猫」のママで、このミナミのバーは、たいして美人がいるわけではないが、なんとなく気さくで、キタのバーのように乙にすましたところがない。それで、気に入っていて、ときどき行くことにしているのだが、そういう気さくなフンイ気

をつくり出しているのはひとえにエイ子の人柄である。年のころはすでに三十も半ば、ご面相もさしていただけないが、いつもニコニコして、気立てはよく、勘定はごまかさない。ただ、このエイ子、自動車を自分で運転するとなると、人が変る。酒をのむと人格が一変するという人間がいるものだが、彼女はお酒のほうはわたしと互角にウイスキーののみくらべができるぐらいで、人格に影響はない。問題は自動車である。それで、人格がまさしく一変する。

まず、飛ばすのである。自分の車のまえに車が一台でもあると、もう落ちつかない。どんな無理をしてでも追い越そうとする。それにわたしがもうちょっとゆっくり走れやと言うと、みんな、早う走ってはりますのや、ここ高速道路でっせ、下手にスピードゆるめたらかえって危のうまっせとぶっちょう面で答える。いつもの愛想良さとはうって変った感じで、今にも夜叉でも立ちあらわれそうである。なんでもヨーロッパあたりでは、みんな、それぐらいの速度で飛ばす。飛ばさないのは人間でないそうである。ゆっくりと走ったりすると逆に罰金をとられたりする。エイ子はいつでもそんなお説教をするが、わたしが黙っているのは、下手に逆らうと、意地になって余計スピードをあげるからである。なにしろ、相手は生殺与奪の権をにぎっている。からだごとどこかへもって行かれるような感じがして、わたしには自由がない。あれはいやである。つくづく、いやである。夜でも、景色が見えへんがなとわたしは言ってやるのだが、こんなまっ暗なのに景色なんかありませんがなとエイ子はとりあわない。しかし、暗いなかでも、景色は、やはり、見えるのである。夜行列車からでも、わたしはときどき窓から外を見るのだが、そんなときでも景色は、やはり、ある。しかし、そんなことを車のなかでエイ子に言ってみたところで仕方がない。相手は猛り狂っているのである。何に猛り狂っているのか知らないが、わたしが、そんなスピード出して何がいいねん、わしら、胸がドキドキして来て心臓がわるうなって来るわと言うと、社長はんはな、幸福やねん、

満足してはりますねん、そいでな、スピード出さんでもよろしますねんと奇妙な答を言った。
泊るのは大阪市内の谷九（たにきゅう）あたりにしていたが、ああいうところの連れ込みホテルは昼間からでも雨戸をしめきっている。わたしは必らず、窓を開ける。窓を開けると高台にあるだけにミナミの夜景が見えるのだが、わたしはそういう下界の眺めが好きで、何見てはりますねんとエイ子はいつでもふしぎそうに訊き、わたしはそんなときいつでもわざとのようにつっけんどんに答える。何やら心のなかをのぞき込まれたような気がするのである。景色や。夜でもな、景色はあるのや。
谷九あたりの連れ込みホテルに行くと言っても、わたしはエイ子にほれているわけではない。好きは好きだが、ほれた、はれたと言うにはあまりにも二人とも年をとりすぎているし、エイ子はそんなヨロメキ・ドラマに出て来るような、スラリとして痩せがたの憂愁夫人のふぜいはない。わたしがエイ子にひかれているとすれば、やはり、気だてであろう。二人で寝そべって、あれこれ世間話をしていて、それが気にならないのである。
二人が気が合っているのは、もうひとつ、二人とも今やことを行なうにさして熱心でないからかも知れない。四十の中だるみというが、わたしがその中だるみなら、エイ子のほうでも三十の中だるみというのがあるのではないか。ホテルの部屋に入るなり、早速ことを始めるというようなことはたえてなく、今では、まず風呂へ入って、それもひとりで入って、肥った大きなからだでザブザブ湯を満ちあふれさせてから（わたしはそんなゆたかな感じが好きだ。家でそんなことをするとトミ子が必らず文句を言うので連れ込みホテルで思う存分お湯をあふれさせるのだが、エイ子は何にも言わない。もっとも、どれだけお湯をあふれさせたところで割りましの料金をとられるわけではない。いや、とられたところで、わたしが払うのだ）、テレビをつけ、部屋にそなえつけの冷蔵庫のビールをのみ、これはいかにもわたしらしい雑然とした取り合わせであると言ってエイ子は笑う

のだが、どの連れ込みホテルの冷蔵庫にもビールといっしょにおさまっているアンミツの鑵詰を食べ、これやったらうちの店のアンミツのほうがはるかにうまいなと言う。もっとも、そうは言いながらも、食べているのである。食べ残したことはない。エイ子のほうもエイ子のほうでわたしにつづいて風呂に入り、わたしほどではないがお湯をあふれさせてから上って、テレビ、ビール、アンミツに合流する。これでは何のことはない、トミ子と家でしょっちゅうやっていることと大差はない。実際、家でのように、そのまま何にもしないで眠ってしまったこともさいさいであった。ただ何にもしないままでホテルを出たことはなかった。朝がた、あわててするのである。その点は家にいるときとちがったが、ただ、そのときでも、宿代を払っているのやないか、せんとソンやないかという気持が働いていなかったとは言えない。お金を払った以上、いつでももとはとりたい。

車も買わんと、旅行も行かんと、そんなにがんばって働いてどうしはりますねんと、カナエの明日の遠足の準備をしながら、トミ子がいつになく真面目に言い出したことがあった。近所の人かて、みんな、それぞれに忙しい人でっせ。そやけど、休みになったら車でどこかへ家族連れて出かけるし、外国にも行かはる。そんなふうに言い出したトミ子に、そういう連中とわしはちがうんやでとわたしもまたいつになく力をこめて言った。見そこなわんといて欲しいとも言った。言うなれば、彼らはただ現状に満足している連中なのである。毎日毎日、日銭が入って、車が買えて、ゴルフに出かけることができて、香港に行けて、というようなみみっちいことでよろこんでいる幸福な人たちなのである。わしはちがうぞともう一度くり返してやった。わしはそんなケチな小商人とちがうねんで。そうも言ってやった。

どこがちがいますねん。

トミ子はすぐ訊ね返した。さっきからカナエの洋服に名札を縫いつける作業に没頭していて、そ

の問を発したときにもべつに頭を上げないでいて、それはふつうならいかにもわたしを小バカにした感じの問であったが、ふしぎにそんな感じはなかった。まあ、何と言いましょうか……わたしはもったいぶった。

つまり、志のちがいやな。

わたしはさっきからビールを飲んでいたので、また一本、新しい罐をボコンと音をさせて開いて、罐にじかに口をつけた。わたしは罐ビールというのがどういうわけか好きで、うちの買いおきはすべて罐ビールである。罐ビールのほうが無駄なところにお金をかけていない気がするのかも知れない。そこは薄利多売のわたしの商売哲学にかなっている。

どんな志ですねんと、わたしの思惑ではトミ子は訊ね返して来るはずであった。ところが、トミ子はあいかわらず名札つけに余念がない。明日の遠足にリュックサックをもって来い、リュックサックには名札をつけなさいというのが幼稚園の緊急命令なのである。今の幼稚園はほんとうにうるさいことを言うものだ。昔は——いや、わたしは幼稚園なんかへは行かなかった。行くはずであったのが、親父が「出版事業」に失敗して、そんな無駄金はつかえぬことになった。「出版事業」と言っても、たいしたことをもくろんだわけではない。夜店の本屋のたたき売り用の講談本の出版をもくろんだのである。そのまえはわたしのアンミツ屋ではないが汁粉屋、さらにそのまえは区役所のレッキとした吏員で（が小金をため込んで、汁粉屋を始めたのである）、たとえ物は夜店のたたき売り用の本であっても、「出版事業」の経験はかいもくなかったから、失敗したのは当然である。商売の才は、母親の話やらわたしの見聞やらを総合して考えてみると、まるっきり無かったようだ。区役所の吏員をチンマリとつづけていればよかったのである。なまじ「出版事業」なんかに、どうせ誰かにおだてられて、その誰かは甘い汁を吸ったにちがいないが、手を出さねばよかった。

「出版事業」とはいかにも大げさな言い方だが、親父の戦死の公報が入ったあとで家に残された遺品を整理していたら、「貴重品」と自分で書いた古びたハトロン紙の袋のなかから履歴書が出て来て、そこに、「昭和×年五月ヨリ同×年一月迄出版事業ニ従事ス」とれいれいしく書かれていたのである。「貴重品」と言っても、何かめぼしいものがその袋のなかに入っていたわけはない。履歴書のほかに満期解約済の保険の証書と戸籍抄本とガス代の集金の領収書のとじたのと、それともうひとつ鼻紙につつんだスルメの脚のようなものがあって、これ何んやねんと母の眼のまえにつまみ上げながら訊くと、ヘソの緒や、お父はんのな、ヘソの緒やと母は言った。そういうヘソの緒やら何やらをどうしたのかと言われるかも知れないので念のために言っておくと、きれいさっぱりと焼けてしまった。もちろん、空襲のおかげである。

親父もあれで志を抱いたものだろう。そう見てもよろしい。トミ子が、わたしの志のことについて一向に訊ね返して来ないせいか、わたしは自然にそんなことを考えていて、それは何やらさびしげな感慨であった。三十で区役所の吏員から転職して汁粉屋を始めて、それはどうやらうまく行ったらしいが（アンミツ屋を始めたときにその親父の「成功」が頭のなかにまるっきり無かったとはいえない）、それからさらに転身して「出版事業」なんかに手を出したのがまずかった。それもまた志のなせるわざかも知れないが、ただ、親父の場合、志に附随する才能がなかった。

まあ、志をもつことはええことやで。

ボーイズ・ビー・アンビシャスとも言うではないかとも言った。三十半ばで、志、いや、大志をもつというのはたいへんなことではないか。そこのところはよく判ってもらわんと困るな。そんなふうにも言った。具体的に言うなら、今年の末までにトンカツ屋のチェーンをもう一店ふやす。場所は今考えているところだが、今度は郊外の団地に進出する。何とかニュータウンの中心のところ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com